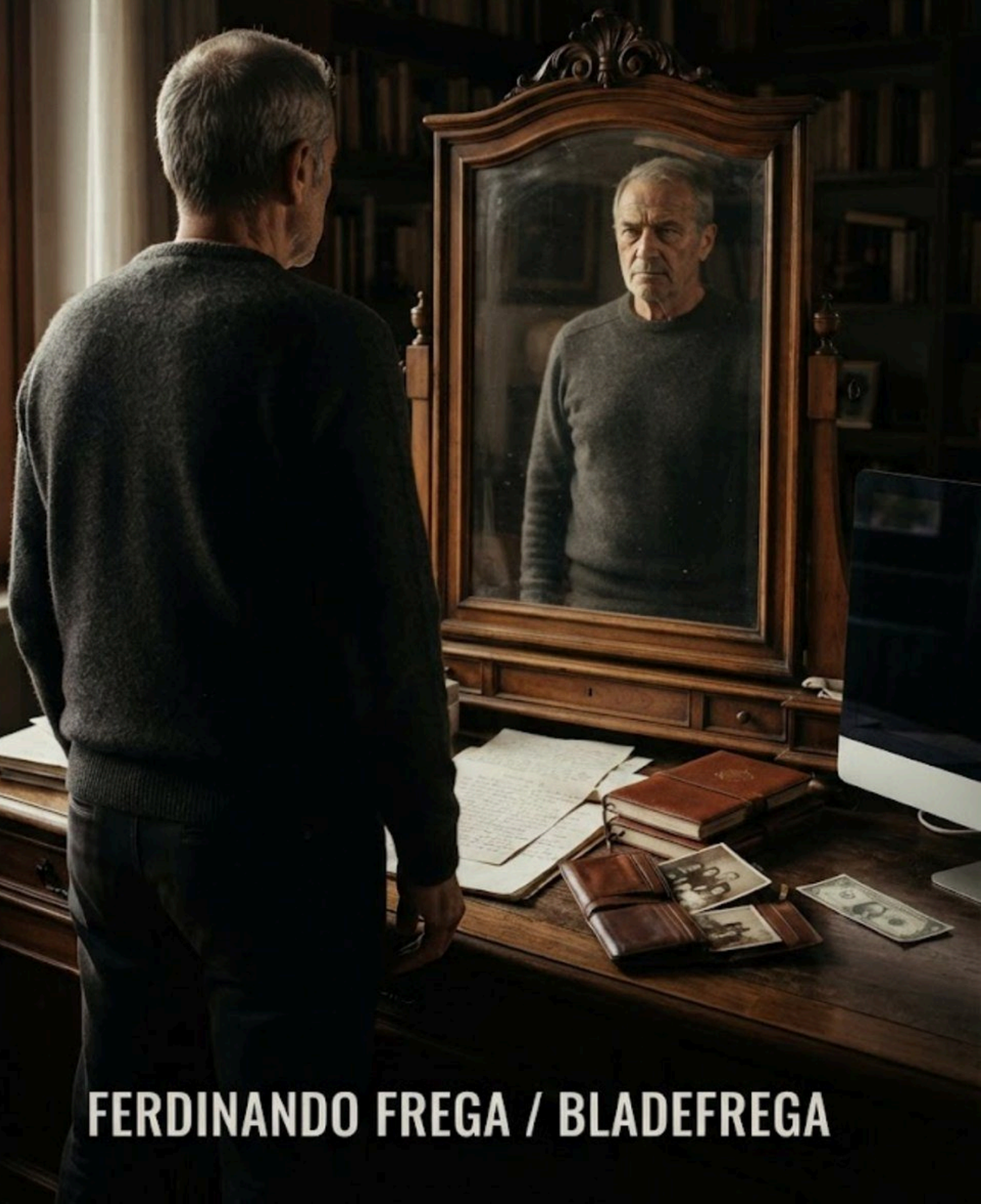


# HE IS DEAD. EXPLAIN THIS.

My Father's Funeral Was the End of His Life.  
Not of His Presence.



**FERDINANDO FREGA / BLADEFREGA**

## 彼は死んだ。これを説明してくれ。

父の葬儀は、その人生の終わりだった。存在の終わりではない。

---

父が死んだ。

これは理論ではない。

葬儀があった。

棺があった。

墓地があった。

親戚たちがいて、握手を交わし、声をひそめ、役に立つことがもう何ひとつ言えなくなったときに人が何世紀も繰り返してきた同じ文句を、繰り返していた。

父は79歳だった。

私は60歳だった。

死の算術は、どこまでも明快だった。

その後に起きたことは、そうではなかった。

1年のあいだ、私はまともな男なら誰でもそうするようにふるまった。

父を悼んだ。

父を思い出した。

父を恋しく思った。

ときどき、父の話をした。

たいていは、しなかった。

人生は、辛抱強い債権者のように、毎朝取り立てにやって来た。

請求書。

仕事。

家族。

責任。

日々は週になった。

週は月になった。

それから、何かが変わった。

突然にではない。

劇的にでもない。

静かに。

鉄に錆が浮くように。

夜明けが部屋に入ってくるように。

時間が断りもなく自分に手を加えていたことに、息子が気づくように。

昼食にワインを1杯飲むようになった。

父がそうしていた。

唐辛子に取り憑かれた。

父の大好物だった。

しつこい咳が出はじめた。

父が何年も、出ていないふりをし続けた、あの耳障りな咳と同じものだ。

次に来たのは冗談だった。

同じ乾いた皮肉。

同じ間合い。

オチを言う前に微笑む、同じ癖。

ある晩、鏡に映った自分がふと目に入った。

一瞬、笑った。

それから、やめた。

顔には見覚えがあった。

だが、その男には見覚えがなかった。

あの感覚は、こうとしか説明できない。

私はどこから見ても私だった。

それなのに、そこには別の誰かが立っているようだった。

それが始まりだった。

あるいは、もっとずっと前に始まっていて、私が気づかなかっただけかもしれない。

同じころ、別のことも起きた。

2026年6月9日、古いWordPressサイトを更新しようと、パソコンの前に座った。

そういう予定だった。

ただの事務作業。

現実がしつこく存在し続けるせいで大人がこなす、あの退屈な用事のひとつだ。

ところが、私は新しいドメインを買った。

Gillettenarrative.com。

名前をひとつ、こしらえた。

そして、誰にも頼まれていないものを作りはじめた。

奇妙なのは作業ではなかった。

奇妙なのは目的だった。

何かを売ろうとしていたのではない。

事業を立ち上げようとしていたのでもない。

投資家を追いかけていたのでもない。

誰かに認めてもらいたかったのでもない。

すべてを、ただで差し出していた。

働けば働くほど、筋が通らなくなっていくた。

1日10時間。

12時間。

15時間。

20時間。

執着というものに事務所があるなら、私はその夜勤責任者になっていた。

それでも、続けた。

すると、Bingが思いがけないことをした。

私の書いたもののひとつが、Gilletteの検索で1位に出たのだ。

家族は運だと言った。

偶然。

まぐれ。

私も同意した。

試してみる、その直前までは。

もうひとつ作品を公開した。

また起きた。

さらにもうひとつ。

また。

やがて、偶然でさえ説明を求めはじめた。

義理の兄弟は弁護士のことを心配した。

私は、何が起きているのかを理解できるかどうかを心配した。

このふたつは、まるで違う心配だ。

一方は結果を恐れる。

もう一方は原因を探す。

私は昔から原因のほうが好きだ。

だが、答えを追いかけているうちに、体が会話に割り込んできた。

まず、腺の炎症。

次に、歯の膿瘍。

それから背中痛み。

それから脚の痛み。

症状が次から次へ。

致命的なものは何もない。

劇的なものも何もない。

男ひとりに注意を払わせるのに、ちょうど足りるだけ。

ある日、地下室で古いパソコンのマウスを探していて、祖母の写真を見つけた。

父の母だ。

探していたわけではない。

それでも、祖母はそこにいた。

忘れられた箱の中で、待っていた。

写真を財布に入れた。

理由があったからではない。

入れない理由がなかったからだ。

後になって、こうしたことのいくつかを妻に説明しようとした。

妻は注意深く聞いた。

それから、精神科医の予約を入れた。

まったくもっともな反応だと思った。

正直なところ、私だってたぶん同じことをしただろう。

そのころにはもう、ひとつの問いが頭に居座りはじめていたからだ。

危険な問い。

答えがあるからではない。

ないからだ。

人が死ぬとき、いったい何が生き残るのか。

法的に、ではない。

生物学的に、でもない。

宗教的に、でもない。

人間として、だ。

声か。

癖か。

記憶か。

しぐさか。

ワインの好みか。

微笑みか。

父親は姿を消しながら、なお別の人生の骨組みの中に居続けることができるのか。

わからない。

わかっているのは、起きたことだけだ。

父を探せば探すほど、墓地では見つからなくなった。

自分の中に見つかるようになった。

やがて体の不調はおさまった。

にんにく。

豆。

米。

長い散歩。

時間。

体は回復した。

問いは残った。

ある午後、ポケットに1ドルを入れて家を出た。

月末までそれで食いつなぐつもりだった70ドルのうち、残っていたのはその1ドルだけだった。

幸い、食料庫は財布より豊かだった。

米。

豆。

玉ねぎ。

にんにく。

男ひとりを生かしておくには足りる。

誰かを感じさせるには足りない。

通りで、ふたりの老人に出会った。

貧しい。

品位がある。

年寄りがしばしばそうなるように、人の目に映らない。

金をくれとは言わなかった。

助けてくれとも言わなかった。

ただ、そこにいた。

私は最後の1ドルを渡した。

「これでけんかはしないでくださいよ」と私は言った。

「使えなくても、運くらいは運んできてくれるかもしれません」

ふたりは笑った。

私は歩き去った。

何メートルか行ったところで、ひとりが私を呼び止めた。

「なあ、善い人よ」

振り向いた。

老人は微笑んだ。

それから、私がいまも忘れずにいることを言った。

「生きたことはすべて、たったひとつの理由で語ることができる。

それが起きたからだ」

そして歩き去った。

二度と会うことはなかった。

人生が苦しくなると、人はよく神を探す。

私はめったに探さない。

神を拒んでいるからではない。

探すのが、昔からあまり得意ではないからだ。

観察するほうがいい。

眺める。

注意を払う。

たいていの人が取り合わないものを、じっくり見る。

偶然。

写真。

微笑み。

生きている息子の癖の中に現れる、死んだ父親。

父は死んだ。

それは知っている。

葬儀がそれを証明した。

棺がそれを証明した。

墓地がそれを証明した。

だが、死が父の人生を終わらせたのだとしても、存在までは終わらせなかった。

同意できないなら、それでまったくかまわない。

信じてくれと頼んでいるのではない。

私が自分に向けたのと同じ問いを、あなたにも向けているだけだ。

彼は死んだ。

これを説明してくれ。

フェルディナンド